

特別展 戸栗コレクション

有田の染付と色絵

—伊万里・柿右衛門・鍋島—



染付楼閣山水文平鉢

渋谷区立松濤美術館

会 期

昭和59年11月13日(火)

、

昭和60年1月20日(日)

第一会場

地下一階主陳列室

第二会場

二階特別陳列室

解 説

時代が近世に移る17世紀初頭、肥前(佐賀県)有田川沿いの丘陵地帯有田を舞台に、朝鮮系帰化陶工を中心として、磁器の創成という日本陶磁史上の一大革新が行われた。

やがて、有田の磁器は染付・色絵の技術を駆使して、伊万里・柿右衛門・鍋島の三様式をつくりあげ、国内外に高い評価をえ、わが国近世陶芸の一方の雄となるとともに、西欧の陶芸にも多大な影響を与えた。

◎ 伊万里

豊臣秀吉の朝鮮侵略に出陣した西国大名の多くが、帰国に際して、朝鮮より陶工などの技術者を

つれ帰り、領国の殖産を計った。佐賀の鍋島直茂もその一人であった。そして、その家老多久安順に伴われてきた陶工の一人李参平(日本名金ヶ江三兵衛)が、泉山に磁鋳を発見し、元和2年(1616)に天狗谷に開窯したのが日本の磁器の嚆矢とされる。しかし、近年の考古学的調査では、最古の磁器窯は慶長10年(1605)前後に築かれたとみられ、また、文献の上では日本人家永正右衛門開窯説もある。

創業時の磁器は初期伊万里と称され、李朝風の単調な文様の染付が多く、胎土の粘性に欠けるため、大きな壺瓶類は焼造できず、皿類でも大形のは、高台が小さく、高台まわりの壁が厚い。また、



染付梅山水文徳利



染付二果文皿



色絵牡丹文瓶

釉薬は生掛け（素焼しない）で焼成火度が低いいため細かい貫入が入り、藍の発色もよくないなどの特徴がある。

寛永年間（1624—44）にはいと、文様に中国明末の景德鎮民窯製の古染付の影響が濃くなり、焼成技術も向上して青味を帯びた上釉・濃い藍色の染付ができるようになる。商品価値の高まった有田磁器は、外港伊万里津より国内各地にもたらされ、鍋島藩もその保護育成につとめた。有田磁器が「伊万里」と称されるのは、この積み出し港の名に由来する。

正保年間（1644—48）に入ると、中国磁器に準じた作風が強まり、焼成技術も大幅に向上し、更に色絵技術が開発されて、古伊万里様式として新たな展開を見せるに至った。

一方、中国大陆における明清鼎革の戦乱で中国磁器貿易が困難となったオランダ東インド会社（略号 V.O.C.）は、中国磁器にかわるものとして伊万里を選び、伊万里はその市場をヨーロッパに広げた。万治年間（1658—61）より盛んとなった伊万里の輸出は、年とともに増大し、型見本による注文生産も行なわれた。ヨーロッパの王侯貴族らに愛好された伊万里は、18世紀になると、マイセン（独）などの窯で写しが作られるようにまでなった。

寛文年間（1661—73）から宝暦年間（1751—64）にかけて、伊万里是最盛期を迎える。鍋島藩の殖産業としての比重が増大し赤絵屋（色絵磁器業者）の登録制が行なわれるなどの保護統制策がとられ、分業による量産・国内商品流通機構の充実に背景に、元禄文化の影響を受け華麗に花開いた。品種も、皿鉢・壺瓶の日常雑器から、人形・神仏具まで多彩となり、需要層も大名・富商から一般庶民にまで広まった。装飾技法も、染付・色絵併用の染錦や金欄手と多彩になり、文様も日本画・染織・絵手本に材を取るなどして多様化していった。

◎ 柿右衛門様式

伊万里の中の一群の色絵磁器を柿右衛門様式と称する。色絵とは、一度本焼した磁器に色釉をもって文様を描き再焼する技法で、赤絵ともよばれる上絵付の一種である。この技法は、酒井田家に伝わる文書によれば、伊万里の陶商東島徳左衛門が長崎在住の中国人より教えられ、それを伝えら



色絵寿字宝尽文鉢



色絵花鳥文面取壺(柿右衛門様式)



柿地色絵菊唐草文皿

れた初代酒井田柿右衛門が、ごす権兵衛と協力して、正保の初め頃に完成したという。

初期の色絵は、中国磁器の影響をうけ、器面を文様で埋め尽したり、枠取りした窓の内側に主文様を、外側に従文様を描く構図に特色がみられる。

寛文年間、磁器輸出が盛んになるとともに素地の純白化が進み、延宝年間(1673—81)には乳白手素地が完成し、細密な描線・優雅な配色で、素地の余白を生かした構図法がとられ、文様の和様化がみられ、柿右衛門様式として成立する。

天和(1681—84)貞享(1684—88)元禄(1688—1704)の頃には、乳白手素地も一層洗練され、描線・配色もより細密・繊細となり、様式として完成する。同時に、土型による型押し整形法による量産が行なわれた。輪花形・菊花形などの皿鉢類や、肉筆浮世絵に影響されたとされる人形は、この法によるものである。文様は、主たる購買先である西欧諸国の好みを反映し、中国の図様を基に日本的装飾空間を生かしていることに特色が見られる。

輸出磁器としてもてはやされたこともあって、短期間に完成された柿右衛門様式であるが、伊万里の金襴手に輸出の中心がうつり、西欧で、柿右衛門様式の倣造が行なわれるようになると、その輸出もふるわなくなり、元禄末頃からは、内需の拡大をはかって、日本的意匠が増えていった。

◎ 鍋島

鍋島とは、佐賀鍋島藩の御用窯の製品で、藩主の御用や、将軍・諸大名への贈答に供された。その技術は、有田の陶工に全て負う。和様・唐様にとられない独創的な高雅かつ典雅な様式で知られ、精緻なることは、明清の官窯に比肩するともいわれる。

鍋島藩窯は、寛永5年(1628)岩谷川内に創設され、寛文年間に柿右衛門窯のあった南川原に移った。この時期までの作を古鍋島・前期鍋島という。ついで、延宝3年(1675)に大川内山に移り、鍋島様式として完成され、盛期を迎える。今日見る作品の多くが、この時期のものである。

鍋島の特色は、厳しい規格であり、皿では一尺・七寸・五寸・三寸のやや高目の高台を持つ木盃形と呼ばれる皿が多く作られた。技法としては、染付・色絵のほか、青磁釉・銚子釉・瑠璃釉などが用



色絵龍田川文皿



染付水仙文皿

いられ、染付では、墨はじき（素地に墨で文様を描いて全体に染付を施し、素焼すると墨の上の染付がとんで白抜きになる）の技法が、色絵では、染付で輪郭取りして賦彩する方法がとられた。

初期の鍋島では、染織模様や和様のモチーフを再構成して皿の見込全面に描きこむ「つぶし」の構図が多いが、盛期には、余白を充分にとったり、中央白抜きの構図がとられる。

また、盛期には、寛文から元禄にかけて、江戸や京阪で刊行された図式本や小袖雛形本に題材をとったり、絵手本稽古帳によりながら、器形に調和させて構成しなおし、自由かつ創造的な意匠にしあげている。

元禄期に様式を完成した鍋島は、享保頃より文様の踏み返しとしての硬直化が進み、後期には、器式こそ厳格であるが、潑刺とした精気が失われていった。

伊万里・柿右衛門・鍋島はそれぞれ独自の様式を形成したが、それを作りあげたのは有田の陶工たちであり、相互に影響を及ぼしつつ、江戸時代の陶芸として顕著な展開を示した。

本展では、渋谷区在住の戸栗亨氏の蒐集された陶磁器コレクションの中より、有田の染付・色絵磁器百余点を選び陳列し、有田磁器の展開を追求するとともに、その華麗な世界に触れていただきたいと考えます。

◎ 講演会 ◎

* 12月1日(土) 午後2時～

「日本のコレクションに見る貿易陶磁」

根津美術館学芸課長 西田宏子

* 1月12日(土) 午後2時～

「17世紀の染付と色絵」

東京国立博物館陶磁室長 矢部良明

※ 都合により、日程の変更をしましたので、御了承ください。

特 別 陳 列

渋谷区在住作家の作品

サロンミューゼ (2 階) 出品目録／作家略歴 (50音順)

荒井朝吉

「古城の詩」紙本着彩 F50号 昭和58年(1983)
明治44年(1911)東京に生まれる
昭和8年(1933)川端画学校日本画科卒

飯田満佐子

「波」紙本着彩 F50号 昭和38年(1963)
大正8年(1919)東京に生まれる
昭和29年(1954)大東文化大学中国文学科卒

伊藤隆康

「同時に存在する半球体」アルミニウム 高さ60cm 昭和43年(1968)
昭和8年(1933)兵庫県明石市に生まれる
昭和33年(1958)東京芸術大学絵画科卒

入山白翁

「柿」漆画 変形30号 昭和50年(1970)
明治37年(1904)新潟県白根市に生まれる
昭和8年(1933)東京美術学校漆工科卒

大久保泰

「早朝の運河 (ベニス)」油彩・キャンバス F50号 昭和48年(1973)
明治38年(1905)愛知県豊橋市に生まれる
昭和3年(1928)早稲田大学商学部卒

児玉幸雄

「ランプを売る女」油彩・キャンバス F20号 昭和57年(1982)
大正5年(1916)大阪市に生まれる
昭和14年(1939)関西学院大学卒

五味秀夫

「大通り」油彩・キャンバス F30号 昭和47年(1972)
大正11年(1922)東京に生まれる
昭和21年(1946)東京美術学校卒

助川武史

「笛を吹く少女」石膏・着彩 高さ118cm 昭和56年(1981)
昭和15年(1940)茨城県に生まれる
富永直樹に師事

近岡善次郎

「そのえ地蔵(東北民話による)」油彩・キャンバス F50号 昭和50年(1975)
大正3年(1914)山形県新庄市に生まれる
昭和8年(1933)文化学院美術部卒

辻 朗

「雪のあと」油彩・キャンバス F50号 昭和52年(1977)
大正8年(1919)東京に生まれる
昭和20年(1945)東京美術学校油彩科卒

西嶋俊親

「河畔待春」油彩・キャンバス F20号 昭和58年(1983)
昭和3年(1928)東京に生まれる
昭和25年(1950)東京美術学校油画科卒

吉本直貴

「粒子と形態」砂鉄 アクリル樹脂 高さ137cm 昭和57年(1982)
昭和15年(1940)山梨県に生まれる
昭和40年(1965)東京芸術大学工芸科卒

【美術相談】

専門知識と経験豊富な美術作家を招き、みなさまの文化活動の援助になればと美術（制作）相談室を開設します。

★相談内容

洋画・日本画を中心にみなさまの制作作品を見て、相談指導をします。また美術史・美術図書などの相談もお受けします。

★相談日・相談美術作家

■相談日・相談美術作家■

●11月25日(日) 午後1:00～4:00 ●

洋画家・西嶋俊親氏／日本画家・滝沢具幸氏

●12月16日(日) 午後1:00～4:00 ●

洋画家・遠藤原三氏／版画家・畑農照雄氏

●1月15日(火) 午後1:00～4:00 ●

洋画家・磯村敏之氏／日本画家・荒井朝吉氏

★申込方法

事前に電話で相談内容を申し込みください。

【美術映画会】

●11月18日(日) 午後2:00～3:00 ●

「色鍋島」「唐津」

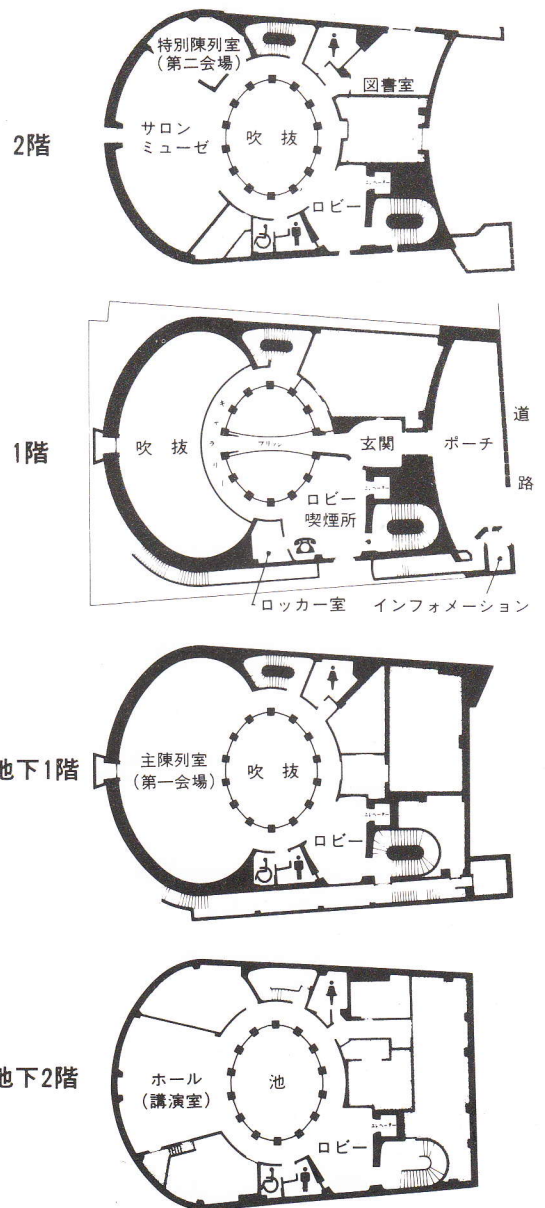
●12月2日(日) 12:00～1:00 ●

「柿右衛門」「染付・近藤悠三」「中国の陶磁」

●1月15日(火) 午後2:00～4:00 ●

「プラド美術館」

松濤美術館・平面図



会 期 昭和59年11月13日(火)～昭和60年1月20日(日)

休 館 日 第2日曜日及び他の週の月曜日・祝日の翌日(11月24日は27日に振替)・年末年始

11月／19日(月)・26日(月)・27日(火)

12月／3日(月)・9日(日)・17日(月)・24日(月)・29日(土)・30日(日)・31日(月)

1月／1日(火)・2日(水)・3日(木)・7日(月)・13日(日)・16日(水)

開館時間 午後9時～午後5時(ただし、入館は4時30分)

入 館 料

	個 人	団体(20人以上)
一 般	200円	160円
小・中学生	100円	80円

案 内 図

